

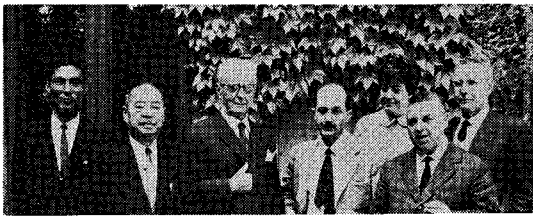
本四委員会と種谷さん

岡 本 東 一 郎*

日常、先輩知己その他、数多くの赴報を見聞し、そのつどさまざまな感慨を覚えるものでありますが、去る8月4日、種谷さん急逝のお知らせを受けた瞬間の驚ろきは格別でありました。実はその数日前の7月31日、土木学会本四委員会**の縮小委員会に、平素からご精勤の種谷さんがお見えにならず、私はいつになく奇異に感じましたが、すでに最終報告書も事実上完成した後でもあり、ご病気とは夢にも思わず、お忙しい故であろうと軽く考えた矢先であったからで、その5日前7月27日入院、そのまま不帰の客となられたと承り、哀心より哀惜申し上げた次第であります。

種谷さんは私にとって同窓、同業の先輩であり、何かと御交誼を賜っては参りましたが、特に親しく懇談する機会を多く与えられたのは、私が種谷さんの驥尾に付して“本四”委員会に関係するようになってからのことで、ある時は会議の席で、ある時は視察旅行に同行するなどしつつ、深くその進歩的なお人柄に接したのであります。そもそも“本四”委員会は、きわめて厳しい自然

ありし日の種谷さん (左から2人目・海外にて)



* 正会員 白石基礎工事株式会社

** 本州四国連絡橋技術調査委員会

条件の下で、世界に先例のない長大橋を架設せんとする大目的に相応しく、関係各方面の専門技術者を網羅して構成されたことはご承知の通りであります。他の科学技術と同様、土木工学に関する学問や技術もきわめて多くの専門部門に細分化され、そのいずれもが、独自の進歩を続けつつある現状であるだけに、実際に大工事を施工するに当っては、たとえば種谷さんのような、広い視野に立って、“総合的に仕事のわかる”経験技術者が当然必要となるわけですが、その種谷さんが基礎部会の主査格の委員として、終始熱心に審議に当たられ、委員会の業績に大いに寄与せられた功績は、関係委員ご一同の均しく認めるところであり、さらに会議の場において、常に他の専門意見を熱心に傾聴されつつ、ご自身の体験に基づく新知識を、自信をもって説明なさる立派な態度は私達後輩の敬服の的でありました。

種谷さんは、鹿島建設の重鎮として、近代施工技術にはきわめて明るく、選ばれては土木学会副会長として学会の発展に尽力され、さらに大学の教壇から後進の育成に情熱を傾ける等、きわめて幅の広い指導的技術者でありまして、たとえば、個々には立派な音楽家を多く集めても、総譜のわかる指揮者なしに“オーケストラ”の演奏はできないと同じく、土木の世界においても各専門別技術者の研究成果を適切に集成して実地に活用するために、種谷さんのような総括指導者の必要を、愈々痛感する今日、天命とはいえ、そのご逝去は斯界のためにも洵に惜しむべきことであります。ここに紙上をかりて故人を偲び、ご冥福を切にお祈りする次第であります。

(昭和42年8月15日)

日本土木史 —大正元年～昭和15年—

体 裁 B5判 8ボ横一段組み 本文1770ページ 図410葉 表500点

写真150枚余 上製箱入革製豪華製本 定価12,000円(〒300円)

内 容：第1章 河川・運河・砂防・治山／第2章 港湾・漁港・航路標識／第3章 農業土木／第4章 都市計画・地方計画／第5章 道路／第6章 軍事土木／第7章 上水道・下水道および工業用水道／第8章 土木行政／第9章 建設機械／第10章 トンネル／第11章 発電水力およびダム／第12章 鉄道／第13章 水理学／第14章 応用力学／第15章 土性および土質力学／第16章 測量／第17章 土木材料／第18章 コンクリート／第19章 土木教育史／第20章 学・協会史／付・日本土木史年表